ぶんぶんごまの教材化

学籍番号：5111084
氏　　名：山﨑　佳子

１．研究の目的

「ぶんぶんごま」は昔から続いている伝承遊びですが、保育園実習で行った際に「ぶんぶんごま」で遊んだ経験がある幼児は一人もいませんでした。私は設定保育の時間に「ぶんぶんごま」を作って遊ぶという内容の指導案を書き、指導させていただいたのですが、経験のない子どもたちに回し方のコツを伝えることをとても難しく感じました。作ることを楽しむことが出来ても回せなければ「ぶんぶんごま」の醍醐味は伝わりません。しかし、回せるようになると、様々な力が養えるとても良い教材になると思います。

そこで本研究では、

・幼児にとって回しやすい「ぶんぶんごま」の形、大きさ、厚さ
・わかりやすく伝える指導法

について調査し、教材化することを目的として研究しました。

２．研究内容

１．教材開発・予備実験
　（１）厚さ・重さによる回しやすさの比較実験
　（２）直径の違いによる回しやすさの比較実験
　（３）穴の間隔の違いの比較実験
　（４）形・素材の違い比較実験
２．模擬授業・アンケート調査（事前・事後）
　（１）大学生を対象にした「ぶんぶんごま」の技能習得過程調査
　（２）感覚運動的技能の伝達方法の種類と効果の調査
　（３）「ぶんぶんごま」の教材としての有効性の検証

３．結果

「ぶんぶんごま」を回すには、糸を引っ張る力加減やタイミングが大切だということが分かりました。しかし、その力加減やタイミングが分からない人にとっては難しく理解しにくいものです。そこで、力加減やタイミングを伝える方法として考えたのが、具体的な言葉で伝える方法と、指導者が手を持ち身体で感じてもらう方法です。回すことの出来なかった人からも「言葉で教えてもらうより一緒に手を持って回してもらった方がコツを掴みやすかった」という回答が多数ありました。回せない人にとっては、言葉で言われるだけではコツを掴むことが難しく、理解できない。回せないと次第に遊び自体が嫌になりやめたい気持ちになる。そういった時に一緒に持って実際に回る感触を味わうことで、回す楽しさを知ることができ、自分でも回せるようになりたいと意欲がわいてくることが分かりました。

４．考察

この研究を始める前に私は「ぶんぶんごま」のように初めから回すことのできないような遊びでも楽しみながら何度も繰り返すことでだんだんと上達していくと思っていました。しかしこの研究を通して、ただ、何度も繰り返し練習するだけではなく、幼児にとって分かりやすい方法でその遊びのコツを伝え、練習を繰り返すことで効率良く幼児の意欲を引き出しながら上達していくことが分かりました。これは、「ぶんぶんごま」という遊びだけでなく、ほかの遊びでも活用していける指導方法だと思います。また、この方法は、「ぶんぶんごま」が回せるようになるだけではなく、教えてあげたり教えてもらったりすることで友達同士の関わりが増え、コミュニケーション能力が培われたり、相手に伝えやすくするための思考力や言語表現力、相手の言っている事を理解するための理解力なども養っていくことが出来ます。

これらのことから「ぶんぶんごま」を教材化し、保育の中に取り入れていくことで、幼児の様々な能力を養っていくことが出来るため、幼児にとって遊びながら成長できるとても良い教材になるのではないかと思いました。

（指導教員　福井　広和）